

スペイン語繫辞動詞再考：*estar* + 形容詞の解釈をめぐって⁽¹⁾

大森 洋子

0. はじめに

本論文では、スペイン語繫辞動詞構造、特に *ser* とともに使われるのが一般的な形容詞が *estar* と共起する場合に焦点を当てた分析を概観し、問題点と思われる点を提示する。さらに、それらの考察を通して、繫辞動詞 + 形容詞の分析の可能性について示唆することを目的としている。

スペイン語繫辞動詞 (Verbos copulativos) については文法書の中で *ser, estar* の違いについては常に問題となる場所であり、初級スペイン語の教科書の中でも扱われている。そこで、まず *ser, estar* の違いの説明について整理し、個別レベル叙述、(Predicación de individuo) 場面レベル叙述 (Predicación de estadio, Predicación estadal) の定義、特徴を確認し、その上で、*estar* と *ser* とともに使われる典型的な形容詞、*estar* とともに使われる典型的な形容詞等の例について現在行われている説明を概観する⁽²⁾。それらの分析に関する疑問点を提示した上で、分析の一つの可能性として生成語彙論に基づいた分析を紹介する。

1. 研究の背景、目的

ここで例示している *ser guapo, estar guapo / ser alto, estar alto* の違いは教室では、実際に何かをグループ分けして、形容するときには、*ser*、対象になっているものを話し手の印象等を含めて形容するときには *estar* を使うとし、それぞれがど

んな場合に使われるかを想定させながら説明している。しかしながら、初級レベルでは、むしろ *ser* と使う形容詞、*estar* と使う形容詞として提示、練習し、*estar* + (*ser* とよく使う) 形容詞の例が教科書等に提示されている場合には、解釈としての理解をめざし、産出レベルでの定着をねらう練習はしていない。これらの使用に関して Fernández Leborans (1999, pp.2430-31) では次のように述べている。

Algunos adjetivos perfectivos y ciertos participios son bisémicos, esto es, poseen dos acepciones claramente diferenciadas en el léxico. Una, de significado recto, se caracterizaría por el rasgo aspectual 'perfectivo' y admite 'estar' y la otra, de sentido figurado, derivado del anterior, pero estable u objetivo.

この指摘は、例えば、*listo, despierto, atento* などの形容詞を想定しての記述と捉えることができる。形容詞に2つのタイプがあることに触れ、属性を表す形容詞 (個体レベル叙述という語を使い、形容詞はアスペクト的に無標である) が、それが *estar* と使われるときには、形容詞の再範疇化 recategorización が起こり、場面レベル叙述の形容詞とみなされると説明し、この *ser, estar* の交替は語彙的なレベルではなく統語的な操作であるとする⁽³⁾。

Por otra parte, *estar* admite adjetivos de propiedad, es decir, predicados de individuos

genuinos, que normalmente se construyen con *ser*, así adjetivos que denotan cualidades físicas o sensoriales (*guapo, rubio, calvo, ciego, agrío, azul*…) …Esta clase de adjetivos solo puede ser léxicamente del tipo P-I y, en consecuencia, son aspectualmente no marcados, su recategorización en predicados del tipo P-E no es un fenómeno léxico sino sintáctico.

一方、近年の *ser, estar* の問題を扱った研究では、*estar* + P-I を証拠性という観点に基づいた説明の可能性が指摘されている。例えば、Escandell Vidal (2018, p.103) は、次の例を指摘している。

- (1) a. Ayer vi a María. Está muy guapa.
 b. #Hace tiempo que no veo a María. Está muy guapa.
 a'. Ayer vi a María. Está muy enferma.
 b'. Hace tiempo que no veo a María. Está muy enferma.

これらの例は、(1a) は自然な表現であるが、(1b) は多くの人が違和感を抱くと説明、それに対して P-E とされる (*estar* と共起するのが自然な) 形容詞が使われている (1a'), (b') とともに自然な発話であることを示している。つまり、属性を表すとされる形容詞 (P-I) が *estar* とともに使われる場合は、その状態を発話者が観察していることが前提である、ということの意味している。この分析はスペイン語教育の場で、*estar* + P-I を使うのは実際の印象を述べる時であることを指摘して説明している点につながる。しかしながら、この証拠性に基づく *estar* + P-I の分析についてはいくつか疑問点も残る⁽⁴⁾。

そこで、証拠性に基づく研究の疑問点を提示して考察を行うが、まず次節では、今までの *ser, estar* の研究を Silvagni (2018, 2021) に準拠し

て概観する。

2. Ser versus Estar

2.1 ser, estar の用法概観

スペイン語の大きな特徴と言える *ser, estar* について多くの研究、記述がある。ここでは、Silvagni (2021, p.40) がまとめた次の表に基づいて説明する。

Criterios discursivos	Criterios aspectuales
-Objetividad / subjetividad -Norma general / individual -Nexo	-Permanente / transitorio -Imperfectivo / perfecto -Individuo / Estadio -Incoatividad -Coincidencia central/ terminal

談話的な観点からまとめたものとして、客観性、主観性、一般的な基準、個別の基準、それとつながり (*nexo*) という基準でまとめている。この点について、Silvagni (2021) では問題点として、次のように述べている。

…el hecho de que el uso de *ser y estar* suponga, por ejemplo, una comparación o un nexo con otra situación no es lo que predicen los sintagmas con *ser y estar*. En todo caso, se trata de efectos cognitivos colaterales al significado intrínseco de los sintagmas con los dos verbos. (p.44)

…entender cómo funciona gramaticalmente alternancia *ser / estar* es un asunto, mientras que definir los efectos discursivos de las predicaciones con *ser y estar* es otra cuestión. (p. 45)

また、繋がり *nexo* としての説明についても *estar, ser* の違いそのものについては説明していないとする。

一方、アスペクトによる基準では、永続的、一時的、未完了一完了、個別、状態、始発性、coincidencia (一致) と terminal (終点) でまと

めている。coincidencia とは、認知文法では fondo と figura の関連を説明するために使われるとし、その後、生成文法では、coincidencia central を静的 (estática), coincidencia terminal を動的 (dinámica) としている。(Silvagni, 2021, p. 45-49) これらのアスペクトによるまとめについては、第1に、永続的、一時的という基準は、伝統的にはよく言われているが問題の多いこと、未完了、完了の区別はその基準が曖昧であること、Incoatividad (起動性) を使った説明は estar の表す叙述が、必ずしも主体の初期の状態ではないこと、coincidencia central, terminal についてもどちらかが静的でどちらかが動的という説明は難しく⁽⁵⁾、ser, estar で表される叙述は静的、動的という区別をすればしたらずどちらも静的であると指摘している。

2.2 P-I, P-E に基づく ser, estar の説明

前節での概観に対して、Silvagni (2021) では、ser, estar の区別をする際には、個体レベル叙述 P-I、場面レベル叙述 P-E の基準が有効であるとしている。前者は、あるものの特性、特徴を記述する叙述、後者は、あるものに関わる状態、出来事を記述する叙述という概念である⁽⁶⁾。

これらの P-I, P-E の区別は、これまでもさまざまな言語事象を挙げて、その区別の存在が論じられている。P-E はいわゆる絶対構文の中で使われる、また叙述補語を作ることができるなどを挙げられている⁽⁷⁾。例えば、P-E と分類される seco (乾いた) という形容詞を用いた *Seca la ropa*…は可能であるが、P-I として分類される caro (高価な) という形容詞は **Cara la ropa*…という絶対構文を作ることができないこと、*Con el coche estropeado* (車が故障して) は可能であるが、P-I と分類される japonés (日本の) を使って *Con*

el coche japonés は絶対構文としては解釈されないこと、さらに、*Ana viajó* [*traductora/*rusa/*de Moscú] は文法的な文にはならないが *Ana viajó* [cansada /enferma /de pie.] を作ることができるのは、P-E 叙述をつくる形容詞と共起しているからだと説明している⁽⁸⁾。

2.3 Estar + P-I タイプ形容詞

これまで見てきたように、ser は P-I 形容詞と estar は P-E 形容詞と使われるのが基本的用法と考えられる。しかしながら、(2a), (3b), (3c) に見られるように、estar が P-I 形容詞と使われる例がいくつもあり、スペイン語の初級教科書でもその例が提示されている。一方、逆に (2b) のように estar と共起するのが普通である過去分詞が ser と共起する例があることも指摘されている。

- (2) a. Estás genial.
 b. Las patatas de guarnición, ¿son fritas o cocidas?
- (3) a. El café está frío. …natural
 b. María está inteligente.
 …*marcado, requiere un contexto que justifique la selección de la cópula*
 c. Estás tú muy ferroviario.
 …*más marcado, atípico* (El Jarama からの例)
 (Manuel Leonetti y Gonzalo Escribano 2018, p. 125)

以上の現象については、まず形容詞の性質が関係することが指摘されている。Estar と共起する P-I に分類される形容詞は、評価を表す形容詞 (*inteligente, amable, genial*…), 個人の好みを表現する形容詞 (*delicioso, caliente*…), 身体的特徴を表す形容詞 (*gordo, pálido*…) であるのに対

し、名詞の分類を表す形容詞 (*mortal, australiano, albino...*) などは *estar* と共起するのはごく稀であることが指摘されている。この点について、Leonetti y Escribano (2018, p.126) では *Todo ello se debe a que los adjetivos relacionales expresan propiedades que dificilmente pueden depender de que se dé o no un evento o una circunstancia externa* と説明している⁹⁾。

これらの *ser, estar* の交替はどのように説明したらよいのだろうか。Escandell Vidal y Leonetti (2002, 2016 etc.) では、タイプ強制 (*coercion, coacción*) という操作を設定して説明を試みている。つまり、*estar* と P-I が共起すると、それぞれの性質の不一致が起こり、それを調整するための操作としてタイプ強制が起こり、P-I を P-E と読みかえて解釈するとしている。この点について、Escandell Vidal y Leonetti (2016, p.5) は、次のように説明している。

Lo que la construcción con '*estar*' hace es relacionar la adscripción de la propiedad que se atribuye al sujeto con otra situación, concretamente con aquella en la que el hablante ha obtenido los datos en los que basa su afirmación. Se produce aquí, pues un efecto 'evidencial' -identificación de la fuente de información.

estar を用いた構造が行うことは、主語に付与されている特質を他の状況、具体的には発話者がその断定の基盤となるデータを得た状況に関係づけることである。従って、証拠性の効果、情報の出どころの確定が生じる事になる。

以上が、*ser, estar* の対比、とりわけ *estar*+P-I 形容詞の構造について、生起しやすい形容詞の特徴、およびタイプ強制による説明を概観、考察した。次節では、その過程で生じた疑問を提示し、その解決の方向性を考える。

3. 証拠性に基づく分析：疑問点

3.1 “*estar*”に見られる証拠性

(1a), (1b) で観察されるように、実際に証拠性が問題になるのは *estar* + P-I 形容詞の場合であり、*estar* + P-E の場合には証拠性は関与的ではないと述べている。その場合に証拠性が関連する解釈はどこから生じるかの疑問が残る。Leonetti y Escribano (2018) では *estar* と P-I の形容詞が共起することで、特徴の不一致が生じ、タイプ強制によって調整が行われ、その結果証拠性が生じるとする。一方、(2a), (2b) からわかるように *estar* + P-E 形容詞の場合には証拠性による制限がないとする。*estar* の性質と P-I 形容詞の性質をさらに分析し、なぜ、*estar* + P-I 形容詞の場合にのみ証拠性 (*efecto 'evidencial'*) が関与的になるのかを探る必要があると考える。

3.2 *ser, estar* + 形容詞：意味の違いとの関連

スペイン語の形容詞の中には *ser* と *estar* と共起するが、共起する動詞によって意味が異なり多義の形容詞として扱われるものがある。*estar listo* (準備のできた), *ser listo* (頭の良い), *estar despierto* (目覚めた), *ser despierto* (頭の切れる, 明晰な) などがその一例である。これらの例の場合には、P-I 形容詞が *estar* と共起している場合には、やはり、タイプ強制の結果として扱われるのだろうか。Silvagni (2022, p.211) はこれらの多義の形容詞が *ser, estar* と共起する次の例を挙げている。

- (4) a. Ana está muy aburrida.
 -aburrido (en estado de aburrimiento) P-E
 a' *Ana es aburrida.
 -aburrido (en estado de aburrimiento) P-E

- b. Ana es muy aburrida.
-aburrido (que aburre) P-I
- b' Durante la charla fuiste muy aburrida.
-aburrido (que aburre) P-I
- b'' Cambia un poquito de tema, por favor,
que estás muy aburrida.
-aburrido (que aburre) P-I
- (5) a. Ana es muy despierta, puedes confiar
en ella.
-despierto (hábil, atento) P-I
- b. Cuando quieres, eres muy despierta.
-despierto (hábil, atento) P-I
- c. Desde que le echaron la bronca está
mucho más despierta.
-despierto (hábil, atento) P-I

上記の(4b''), (5c) では前述の多義の形容詞が *ser* と共起する場合の意味で *estar* と共起して使われている。タイプ強制が起こっていると考えないと説明できない例であろう。そしてタイプ強制が行われるかどうかは語の意味解釈が必要になり、その解釈は文脈に委ねられていることになる。タイプ強制がどのような条件で起こるのかを説明しないと分析が恣意的であるとの印象は免れない。

3.3 タイプ強制の働き

タイプ強制が起こることで、*estar* とともに使われている P-I 形容詞が P-E (つまり状態を表す) 形容詞として解釈されるわけでない。例えば、*El guiso está delicioso.* はある状況において変化があったことを表しているわけではなく、対象となる el guiso の *delicioso* という特徴に言及しているに過ぎない。この点は Leonetti y Escribano (2018, p122) でも次のように指摘をされている。

…no se pretende comunicar que el guiso

pueda dejar de *estar delicioso* en otro momento o en otra circunstancia, sino que simplemente tiene esa cualidad; (es cierto que *estar* fuerza la lectura evidencial por la que se entiende que el contenido proposicional es el resultado de la precepción directa del hablante, algo que no se produce con *ser*) --no parece que *delicioso* haya pasado a comportarse como un adjetivo E.

以上のことから、タイプ強制の働きについて明示的に説明されているかに疑問が残る。Leonetti y Escribano (ibid) では、*estar* がもつ特徴と P-I 形容詞の特徴等が共起するとそれぞれの素性の不一致が起こるのでタイプ強制が起こるとしている。しかしながら、形容詞の特徴によって *estar* と共起できるかが変化するとしたら、(4)、(5) で観察されたように形容詞のどの特徴が *estar* との共起を可能にしているのかを説明する必要があるだろう。

3.4 P-I 形容詞とタイプ強制

既に見たように、P-I と P-E の区別の基準として絶対構文、叙述補語として生起できることが指摘されている。(2.2 参照) しかしながら、これらの形容詞を使った文でタイプ強制が起こり、文法的な文が作られるのは *estar* と共起した場合だけである。そうすると何がタイプ強制を引き起こすのかについてもう少し説明を加えるべきであろう。

3.5 形容詞分析の必要性

形容詞のタイプによって、*estar* + P-I の容認可能性が異なるということであれば、それぞれの形容詞の語彙的な特徴とタイプ強制の操作を関連づけて説明する必要があるのではないだろうか。

Leonetti y Escribano (2018) では、*estar* + P-I 形容詞が特定のアスペクトとの共起関係が見られることを指摘し、形容詞のタイプとの関連について論じている。

- (6) a. Estuvo inteligente.
 a' #Estaba inteligente.
 b. El diestro estuvo valiente.
 b' # El diestro estaba valiente.
- (7) a. Estaba caliente.
 a' #Estuvo caliente.
 b. Estaba duro.
 b' #Estuvo duro.

これらの違いについて、形容詞を分類することによって、ある程度の解決はできるとする。

すなわち、評価を表す形容詞 *-inteligente, valiente* などは、それが行為に言及する場合には、*estar* と共起し、行為についての評価であるから完了相と共起することが多いが、一方、個人の好みに関わる形容詞の場合には、個人の直接的な体験と関連させて評価することが多く、不完了相で使われることが多くなると指摘している⁽⁹⁾。分類に関係する形容詞は通常は *estar* と共起することは稀であるが、*estar* と使われる場合にはある特定の状況について述べる形容詞として理解され、現在形で使われる場合には到達動詞のように完了的な意味を担い、過去で使う場合には完了相を持つ点過去が使われるとしている。

- (8) a. ¡Vaya! ¡Estás muy británico!
 b. Hoy estoy vegetariano.
 c. Regatas estuvo democrático en el reparto de obligaciones ofensivas.

(Leonetti y Escribano 2018 p.128)

これら時制による制限がタイプ強制によって説明できるかの疑問が残る。むしろ、これらの時制の制限は、形容詞の特徴、つまり、それらが何を

修飾しているのかに関係してゐるのではないだろうか。その形容詞の特徴によってタイプ制限が適用されるか否かが決まるのではないかと考えられる。さらに、P-I 形容詞が点過去形で *estar* とともに使われる例に関しては、点過去形 *ser* + P-I との違いを証拠性に基づいて説明できるかを検証する必要があると考える。

以上が、証拠性に基づく *estar* + P-I 形容詞をタイプ強制に基づく説明でどこまで解決できるかについて生じた疑問点である。これらの疑問点を概観すると、タイプ強制で *estar* と共起できるようになるという説明だけでは不十分で、形容詞がもつ修飾の可能性、名詞が示す範囲が広い場合に、名詞のどの部分に焦点を当てているのかが大きく関連すると考えられる。例えば、*Juan = valiente* の場合に、*valiente* が示せる範囲は、単に相手（人物）だけではなく、その人の行為に言及することもある。

後者の場合に *estar* と共起すると考えることはできないだろうか。一方で、*estar* + P-I 形容詞においてと証拠性が観察できる (efecto 'evidencial') という点は、タイプ強制だけでは説明できていないと考える。タイプ強制を設定するだけでは説明が不十分であると考え。次節では、これらを考慮した分析の枠組みとして、生成語彙論に基づいた説明の可能性を提示する。

4. 生成語彙論による説明の可能性

4.1 *estar* + P-I : 問題の所在

ser とともに使うのが一般的な形容詞が *estar* とともに使われる場合の意味、ニュアンスの変化を教室で説明するのはなかなか難しい作業である。そのため、実際には意味の違いの説明が比較的わかりやすい *ser guapo, estar guapo* などの例が

教科書では提示されることが多い。しかしながら、そのような説明は、*ser*, *estar* の違いについて状況を設定し提示するにとどまり、産出の練習までには至らないというのが現状ではないだろうか。Silvagli (2022) が指摘しているように、*ser*, *estar* の違いの説明については初級の段階だけでなく、学習のレベルに応じて、さまざまな工夫が必要である。先にみた証拠性に基づいた説明は、P-I の形容詞が *estar* と共起した場合のニュアンスを説明するには適切であろうと直観的に解釈できる。しかしながら、それをタイプ強制のみで説明すると、*estar* と共起した際になぜ意味の変化があるのかについての説明は不十分であると言わざるを得ない。前述の通り、*estar* の基本的意味との繋がり、P-I 形容詞の修飾機能の多様性、名詞のどのような側面を修飾するのかなども見据える必要があると考える。本節では、それらを考慮した可能性の一つとして生成語彙論的な分析について考察する。

4.2 生成語彙論

生成語彙論は、Pustejovsky (1995) によって提唱された、語や句の解釈の多様性を構造化された豊かな語彙意味構造 (=クオリア構造) を設定して説明しようとする理論である。ある語の語彙構造には他の要素と使われた時に必要と想定されるさまざまな情報が記載され、その語彙が実際に使われる環境、すなわち他の要素と使われた状況によって記載されている情報のいずれかが活性化 (*activar*) されて、解釈に必要な意味が生成できると考えている。例えば、*He empezado la novela* (私は小説を始めた) を解釈する場合には、*He empezado a escribir la novela* (私は小説を書き始めた) の解釈と *He empezado a leer la novela* (私は小説を読み始めた) の解釈があるのに対して、

He empezado el diccionario (辞書を始めた) という文では、前者、つまり *He empezado a escribir el diccionario* (辞書を書き始めた) としか解釈されないと説明している。これは、動詞 *empezar* の記述では *empezar una acción* (ある行為を始める) と指定され、共起する名詞によってその意味が補充されて意味が具体化するからである。つまり、語彙情報は不完全指定 (*infraspecification*, *infraespecificación*) されており、その都度その部分の情報が補充され理解されるとする。それぞれの語彙記述は基本的な特徴を持たせ、それがクオリア構造という形で示される。クオリア構造にはつぎの4つがあり、それぞれ以下のように説明されている。

(9) 形式クオリア (*formal structure*, *quale formal*) 語彙項目の分類的な情報

構成クオリア (*constitutive structure*, *quale constitutivo*)

ある特定のものの部分、構成に関する情報

目的クオリア (*telic structure*, *quale telico*) 目的と機能に関する情報

主体クオリア (*agentive structure*, *quale agentivo*) ものの起源に関する情報

例えば、'*mano*' (*hand*) と言う語彙を考える場合に形式クオリアは、「手、平たい形」、構成クオリアは、「人体の一部、そして手の甲、手のひら、指からなる」、目的クオリアでは、「何か (具体的なもの、影響力など) を掴む、また挨拶、謝ったり、差し出したり、書いたりするため」と言うことが明示されることになるが、その主体クオリア自体は明示されないと考えられる。そして、この *mano* が他の語と連結した場合に、そのクオリア構造のどれに焦点が当たるかにより、*escribir a mano*, *pedir la mano*, *tener muchos*

manosに見られる mano の意味が説明できるとする。

このように Pustejovsky (1995) は語彙の使用を分析し、それぞれ共起する語彙の繋がりによってさまざまな意味解釈が生じることを指摘している。また、Pustejovsky (1995) では、名詞のクオリア構造のみが示されているが、全ての語彙項目が同じように分析できるとしている。

4.3. 生成語彙論による分析の可能性

以上のような分析の方法は、estar + P-I を考える際に大いに参考になると思われる。当該形容詞が被修飾語（名詞）のクオリア構造の何を修飾するかを明らかにすることにより、形容詞の意味がより具体化し、estar がもつ素性と合致する意味が指定できるようになり、estar + P-I の解釈が可能になる。例えば、estar 構造において主語に人間が現れるのか、ものが現れるのかで、frío, seco などに意味の指定が変化する。主語が人間の時、その目的クオリアといえる活動に焦点があたり、Aquel cadí estuvo frío e incluso amenazante. のようにその人物の行動が冷たいという意味解釈が生まれるが、食べ物が主語になるとその構成クオリアと言える物理的な側面に焦点が当たると La sopa está fría という温度を問題にした解釈が現れるという分析が可能ではないだろうか。

しかしながら、名詞のクオリア構造のどの部分にスポットが当たるかだけでは証拠性の意味が生じるという点は説明できていない。この問題の解決の一つの手がかりの可能性となるのが Mangialovari (2013) であろう。それによれば、estar の基本的な意味と捉えられる「所在を表す」という点が、名詞のクオリア構造の comportamiento の部分が estar の所在を表すと言う基本的な意味によってが活性化され、証拠性を伴う解釈が生ま

れるという分析が可能になると考える。

5. 終わりに

Ser, estar はいずれもスペイン語において基本的な動詞の一つで、初級の最も早い時期に学習する動詞である。これらの動詞については、これまでもさまざまな研究がなされ、ser, estar の用法の区別についてはたくさんの提案がなされてきている。その中で、比較的新しい研究である証拠性に基づく estar の分析は繫辞動詞研究に新しい視点をもたらしたと言えるだろう。しかしながら、疑問点があることも否定できない。証拠性 efecto 'evidencial' がどこから生じるのかなど、より明示的な説明が欲しいところである。

一方で、本稿が分析の枠組みの可能性のひとつとして提示した生成語彙論についても、名詞以外の品詞についてのクオリア構造についてはいまだに研究が進んでいない。形容詞、動詞のクオリア構造の記述についてももう少し研究し、タイプ強制を使った分析と比較しながら ser, estar + 形容詞の使い分けの枠組みとして有効であるのかどうかも考察する必要があるだろう。

これらの研究を通して、教える際にはどのようにしたら良いのか、またその違いを理解させるためのアクティビティにはどんなものが考えられるかなども今後の研究課題としたい⁽¹¹⁾。

注

- (1) 本論文は、2023年10月7日に行われた東京スペイン語学研究会9月例会の口頭発表の草稿をまとめたものである。研究会に貴重なコメントをいただいたことに感謝を申し上げます。
- (2) 個体レベル叙述 (Predicación de individuo 以下 P-I)、場面レベル叙述 (Predicación de estadio, Predicación estadal 以下 P-E) については、属性叙述、事象叙述、個体レベル、ステージレベル叙

- 述などの用語も使われている。
- (3) Predicación de Individuo (P-I) Predicación de Estadio (P-E) については後述する。
- (4) この点については、Dicen que está guapa. といった表現が可能である、という指摘を受けた。このような間接話法の中に現れる estar + P-I 形容詞の例における証拠性の所在については今後の研究の課題としたい。
- (5) 詳細は、Fábregas (2012), Jiménez Fernández (2012)を参照のこと。
- (6) Stivagni (2018, 2021) では、状態動詞も含めて場面レベル叙述 (P-E) を規定している。
- (7) この点については、発表時に *Juan murió joven. Nació rico (pobre)*. などの例があることが指摘された。今後検討課題としたい。
- (8) その他、pseudocópula 擬似繫辞動詞や挿入句として使われる形容詞も P-E タイプである。
- (9) しかしながら、-¡Vaya! Estás más británico. - Hoy estoy vegetariano. -Aquel día Juan está democrático. -Pedro está muy francés. (Leonetti y Escribano 2018, Escandell Vidal 2018 より) という例が提示されている。これらはある状況で分類を表す形容詞のその特徴的な側面を強調する形で使っていると解釈できるだろう。
- (10) これらの例では、文脈によっては、それぞれ完了相、または不完了相で使うこともあることを指摘している。例えば、Ella estaba valiente, inteligente などは容認可能であり、また *El pollo estaba delicioso. El pollo estuvo delicioso* なども生起できるとしている。
- (11) Silvagni (2022) ではいくつもの教室内で行うアクティビティの例が掲載されている。これらについてもさらに検証を重ね、レベルごとの指導の方法等になんらかの提案を考えたい。

参考文献

- De Miguel Aparicio, Elena (2009). 'La teoría del lexicon generativo' en *Panorama de la lexicología*. Ed. Elena de Miguel. Barcelona: Ariel, pp. 336-368.
- Escandell-Vidal, V. (2018). 'Evidential Commitment and Feature Mismatch in Spanish *Estar* construcción' *Journal of Pragmatics* 128, pp. 102-115.
- _____ (2018). 'Ser y Estar con adjetivos. Afinidad y Desajuste de rasgos. *Revista Española de Lingüística* 48, pp. 57-114.
- _____, y Leonetti, M. (2002). 'Coercion and

- the Stage/Individual Distinction. en Gutiérrez-Rerzach, J. (ed.) . *From Words to Discourse*. Ámsterdam, Esvier, pp. 159-179.
- _____, y Leonetti, M. (2015). "'Estar joven' a los dos lados del Atlántico" en Sáinz González, M. E. y otros (eds.) *Geométrica explosión*, Estudios de lengua y literatura en homenaje a René Lenarduzzi. Venecia. Edizioni. Ca'Foscari pp. 65-77.
- Fábregas (2012), "A Guide to I Land SL in Spanish Prorerties, problems and proposals" en *Borealis* 1 (2), pp. 1-71.
- Fernández Leborans, M. J. (1999). "La predicación: las oraciones copulativas" en Bosque, I. y Demonte, V. (eds), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe, pp. 2357-2460.
- Jiménez-Fernández, A. L. (2012). "What information structure tells us about Individual/Stage Level predicates" en *Borealis* 1(1) pp. 1-32.
- Leonetti, M. (2015). "On word order in Spanish copular sentences" in I. Pérez-Jiménez et. al (eds.) *New Perspectives of the Study of Ser y Estar*. Amsterdam, John Benjamins. pp. 203-206.
- Leonetti, M. y Escribano, G. (2018). 'El papel del aspecto gramatical en las construcciones con estar y adjetivos', *Revista Española de Lingüística* 48, pp. 115-150.
- Mangialawori, María Eugenia (2013). 'Not always a stage. Atypical patterns in Spanish copular clauses' *Iberia* 5, 2, pp. 1-37
- Pustejovsky, J. *The Generative Lexicon*, Cambridge (Mass), MIT Press.
- Silvagni, F. (2017) *Entre estados y Eventos. Un estudio del aspecto interno del español*. Tesis doctoral, Universidad Autónoma de Barcelona.
- _____ (2018). "Sobre la distinción individuo/estadio y su relación con ser y estar". *Revista Española de Lingüística*, 48, pp. 15-56.
- _____. (2021) La gramática de ser y estar. *Cuadernos de Lengua Española*. Arco Libros, S. L.
- _____. (2022) "Ser y estar con adjetivos polisémicos: claves para la enseñanza" en *Del léxico y la semántica a la pragmática de ELE*. enClave, Madrid, pp. 199-238.